

2026 年 7 月号

学生相談室だより

弓削商船高等専門学校

宇佐美朋子(スクールカウンセラー)

梅雨に入り、紫陽花の色のみずみずしさが、ひときわ引き立ってみえます。皆さんいかがお過ごしでしょうか。

いじめについて

今回は、いじめについてのお便りになります。

国立高等専門学校機構 いじめ防止等ガイドラインでは、「いじめは、どこの学校のどの学生にも起こりうること」であり、生命及び教育を受ける権利の存立に関わる以上、何より優先的に取り組むべき学校の最重要課題である」と規定しています。

いじめは、自分や自分の周りには関係のないこと、と思う人も多いかもかもしれません。「いじめではない」と思うとき、誰にも見えないところで、つらい気持ちや嫌な気持ちになり、その嫌な気持ちを持つことも、気持ち自体も認めることができない状況に追い込まれる人がいるかもしれないことに目を向けてみましょう。

精神医学者の中井久夫は、いじめの過程について、「孤立化」「無力化」「透明化」という段階に分けて以下のように説明しています。(中井久夫『いじめのある世界に生きる君たちへ』—いじめられっ子だった精神科医の贈る言葉、中井久夫『いじめの政治学』)

「孤立化」において、いじめられるものがいじめられるに値する(いじめられても仕方がない)ということが共有される。自分よりも下のものがあると考えることが、権力への飢餓感を軽くすることが背景にある。孤立した状態に置かれた人は、「大人に話すことはひきょうである」という圧力にさらされる。

続く「無力化」の段階では、いじめられた側は反逆することを諦め、時に自発的に隷属することもある。いじめる側はここでしくじっては、反転して自分がいじめられる立場になることがあるため必死である。一部はいじめを行う者の手下になる。しかし望んでそうなったのではなく「こんなはずではなかった」と思い続ける。

いじめは次第に「透明化」して周囲の目に見えないものになっていく。一部は傍観者の共謀によるものである。

いじめは、こころの問題でもあることがわかんと思います。一人ひとりが、自分もいじめる側、いじめられる側になりうることや、知らず知らずに上記のような構造を支える立場になりうることを意識して、ひとごとにはしないで、自分や周囲の言動を振り返ってみましょう。

何かおかしい、嫌だ、放っておけないね、というふうに、いじめが生じる初期に気づいて、冷静に考え行動する人が増えると、いじめの問題は解決につながります。

一人ひとり誰もが、かけがえのない大切な存在です。お互いの個性を認め、幸福や成長を喜び、お互いに尊重しあっていけるように努力していきたいものです。